

# 臨床看護師への術後疼痛管理に関する教育プログラムの効果 ～教育プログラム実施前後における看護師の主観的評価の比較から～

key word : 術後疼痛管理、臨床看護師、教育プログラム、主観的評価

○山本奈央\*1、遠藤みどり\*1、井川由貴\*1、藤森玲子\*2、星野裕美\*3、中込洋美\*4、篠原昭子\*4、渡辺美保子\*5

\*1山梨県立大学看護学部、\*2北杜市立甲陽病院、\*3加納岩総合病院、\*4山梨厚生病院、\*5市川三郷町立病院

## I. 研究目的

短縮化している周手術期において、患者の術後疼痛を鎮痛・緩和することは患者の早期離床を促し、術後合併症を予防する上で重要である。しかし、先行研究において看護師は術後疼痛や術後疼痛管理に対する学習経験率が低く、術後疼痛管理に対するジレンマや術後疼痛アセスメントの困難感を有している実態があった<sup>1)</sup>。そこで、研究者らが作成した術後疼痛管理の教育プログラムを実施し、教育プログラムが臨床看護師の術後疼痛に対する認識や実践にどのような効果をもたらすかについて、教育プログラム実施前後の主観的評価から明らかにすることを目的とした。

## II. 研究方法

1. **研究対象** : A県内の総合病院2施設において外科系病棟に所属し、全身麻酔下で手術療法を受ける患者への看護を行っている看護師(管理職を除く)。

2. **データ収集方法** : 1) アンケート調査(以下、調査)(第1回)を実施、2) 病棟単位で術後疼痛管理に関する研修形式での講義を実施、3) 教育ビデオを使用した個人ワークの実施、4) 1ヶ月を目安に術後疼痛管理実践を遂行後、第1回と同様の調査(第2回)を実施、5) さらに1ヶ月後に調査(第3回)を実施。3回の調査においては無記名で実施し、回収は各施設の病棟毎に留め置き法で回収した。

3. **調査内容** : 研究者らの先行研究<sup>1)2)</sup>で明らかにした術後疼痛管理の①自己の考え 62項目、②看護実践 42項目、③対象属性とした。

4. **分析方法** : 統計ソフト SPSS を使用し、「思う」～「思わない」の4段階評定をスコア化した上で、教育プログラム実施前・実施後1ヶ月・実施後2ヶ月の3時点における得点変化を Kruskal Wallis・多重比較により検定した。

## III. 倫理的配慮

看護部管理者に研究協力の同意を得た後、病棟看護師長に研究目的等について説明し同意を得た。対象者には、自由意志を尊重すること、匿名性を保持すること、職務規制や評価等に影響することがないこと、また対象者の負担および業務遂行上の支障をきたす場合は協力を中止できることを依頼文書に明記し確約した。さらに得られたデータは研究以外に使用しないことを文書で伝え、発表についても承諾を得た。本研究は山梨県立大学看護学部研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

## IV. 結果

調査票は第1回 122人、第2回 109人、第3回 102人の回答を得た。対象者は95.9%が女性で、年齢区分は26-30歳代が34.4%で最も多く、臨床経験年数は6-10年が34.4%で

最も多かった。所属部署は消化器外科、整形外科、混合病棟が各約3割を占めた。

①術後疼痛管理の自己の考えでは、第1回目と第2回目を比較し平均値が上昇したものは30項目、第2回目と第3回目を比較し平均値が上昇したものは21項目であった。また、「患者が痛みを訴えたら、鎮痛薬を使用する方が良いと思う」「高齢者の場合は、PCAによる疼痛管理は難しいと思う」「患者の性別や年齢によって術後疼痛の程度が異なると思う」「痛みを感じ方は個人差があると思う」「術後の疼痛管理の主体は患者であると思う」「患者の痛みを一番にわかるのは看護師である」の項目において3時点での得点変化に有意差がみられた。

②術後疼痛管理の看護実践では、第1回目と第2回目を比較し平均値が上昇したものは33項目、第2回目と第3回目を比較し平均値が上昇したものは29項目であった。また、「患者の痛みに対する感受性・経験を確認している」「術後患者の筋の緊張を確認し、必要な場合は皮膚の温熱刺激やマッサージを行うことができる」「痛みのある患者に対して筋弛緩法、呼吸法を促す援助ができる」「ペインスケールを使用している」の項目において3時点での得点変化に有意差がみられた。

## V. 考察

今回の結果から、教育プログラムは看護師自身が痛みを全人的かつ個別的な体験であると認識すること、さらに多角的な疼痛アセスメントの重要性の理解、ペインスケールの使用、非薬物療法の実践に効果的であることが示唆された。プログラム実施後1ヶ月の時点では平均値が上昇する項目が多いが、2ヶ月以降は第1回調査時のベースラインに戻る傾向があるため、プログラム実施後も疼痛管理に対する継続した教育的介入が必要である。今後はさらに多施設での調査を実施し教育プログラムの効果を検証していくこと、さらに術後疼痛管理実践の評価基準を明らかにしていくことが課題である。

## VI. 結論

術後疼痛管理に関する教育プログラムは、看護師自身の術後疼痛に関する認識を高め、疼痛管理の看護実践に効果的であることが示唆された。

<参考文献>

- 1) 遠藤みどり他：臨床看護師の術後疼痛管理に対する主観的評価、山梨県立看護大学紀要第6巻第1号、2004。
- 2) 遠藤みどり他：周手術期看護における術後疼痛管理スタンダード及び教育プログラム開発に関する研究、平成15年度～平成17年度科学研究補助金(基盤研究C)研究成果報告書、2005。

